

## 二十歳の誓い

「好きなことで生きていく。」私が小学校6年生の時に流れていたYouTubeの広告です。ハッとしました。父親と同じことを言っていたからです。芸人に憧れていた私にとってはこれ以上ない魅力的な一言でした。

私は両親から勉強をしなさいとか何かを強制された記憶がなく、いつも言われていたのは「好きなことを見つけなさい。そしてそれを仕事にしなさい。」という言葉でした。でも本当に楽しいこと、好きなことを見つけるということは、とても難しかったです。

小学五年生の冬の初めての経験が、私の好きなことを見つける出発点となりました。「クリスマス会で一緒に漫才せえへんか」友達から誘われ人生初の漫才をすることになったのです。二人でふざけあいながら何度も練習し、そしていざ本番、その反応はやや受けでした。それでも初めて作ったネタで、少しでも笑いをとれたことがこの上なく嬉しかったのです。その半年後の小学六年生の春に漫才クラブができ、友達とすぐに参加しました。それからは毎週一つ新ネタを作り、給食の時間に漫才をするという生活が始まりました。卒業までの一年間、毎週1回5分のネタを作り続けたのです。当然ネタ作りはすごく大変でしたが、ウケた瞬間は最高の気分でメチャクチャ楽しかったです。漫才を通じて相方の凄さも実感するようになりました。とっさのアドリブや自分には出ない発想のボケなど頭の中を覗いてみたいとはこのことかと幼いながらに思いました。次第に相方だったらどうするだろうとも考えるようになりました。

中学校で引っ越し、誰も知らない学校で不安でいっぱいでしたが、その状況を救ったのも漫才でした。毎学期末のLHRに生徒が出し物をするという時間があり、そこで漫才を試してみようと思ったのです。それがきっかけで多くの人に認知してもらえて馴染むことができました。さらに発表や発言などをする際、漫才で得たノウハウが大いに役立ちました。まず話す内容を組み立て、よどみなく言葉が出てくるように何度も何度も練習をし、しっかり準備をした上で人前に立つ。最終的に私の好きなことは「人前で話すこと」だと気がつきました。

小学校の卒業文集には「夢は芸人になること」と書きました。でも今は違います。私の将来の夢は教師になることです。両親がしてくれたように主体性を重んじ、一人一人の個性を尊重して、そして何より生徒を巻きこんで楽しい授業をする「面白可笑しい先生」になりたいです。

このことを二十歳の誓いとさせていただきます。

令和6年1月8日 新成人代表 今井宝希

## 二十歳の誓い

私は、嵐山で育ち、小さなころから人力車のお兄さんに憧れて、今人力車のアルバイトをして、観光案内をしています。地元愛が人一倍強く、嵐山のことなら何でも知っていると思っていました。

ところがいざ、人力車で観光スポットに案内をすると、観光地の歴史や背景など知らないことだらけ。英語も大学受験で必死に勉強したのに、言いたいことが全く通じないのです。野球部で体力には自信があったのですが、夏になると塩分不足で突然足がつるし、最初は散々でした。どうしたら喜んでもらえるのかと必死に悩みました。

中学生の時にフィールドワークで、国有林のため一般には入れない嵐山に入れてもらい、鹿の被害や国の対策の話を聞いたのを思い出しました。その事を話したり、嵐山の景観を保つために、桜の植樹の募金活動もしていた話は、観光客の方からは大変喜んで頂けました。そして今若者に受けているカフェは、200年以上前に建てられた建物の中だけを改装したもので、映える写真が撮れるんです。このように、若者ならではのリアル情報も入れることで、徐々にお客様から「あなた的人力車に乗って良かった！」と喜んで頂けるようになりました。

「どうしたら、人の役に立つことができるのか？」

京セラの創業者の稲盛和夫さんの本の中に「利他の心」と書かれていたのが、ずっと私のモチベーションになっています。自分のために働くのではなく、世のため人のために働くことで巡り巡って自分のもとに帰ってくると説かれたものです。高校時代に野球部の副キャプテンをしていた時、監督の言葉を部員に伝えてもなかなか思うように動いてくれず、どうしてこんなにしんどいことをしているのかとと思っていた時にハマった言葉です。その時から、人が喜ぶ姿、楽しんでいる姿を見ることが、いつも私を動かす原動力になっています。

今、世界は平和といえる状況では決してありません。将来私はそんな世の中を変えてみせます。簡単なことではありませんが、この根本は「利他の心」にあると思います。この考えを忘れず、次世代を引っ張っていける人になることを、「二十歳の誓い」とさせて頂きます。

本日は私達のために、このような盛大な記念式典を開催していただき、ありがとうございます。心より御礼申し上げます。

令和6年1月8日 新成人代表 川合啓太

## 二十歳の誓い

私はずっと自分が一番である人生を歩んできました。小中高と成績優秀で褒められ、そのことを自分でも誇りに思っていました。その得意な勉強を活かして、私は第一志望の京都大学に合格しました。京大に受かったんやから、これからはずっと自信持って生きていける。そう思っていました。しかし、周りは自分より優秀な人間ばかりで、私は京大では劣等生になりました。勉強という自慢できるものを失ったことにより、自己肯定感は下がっていきました。京大の中では私は底辺なんや。特別なんかやないんや。今までの境遇からの落差に対するショックは大きいものでした。

勉強は自分自身との戦いであり、人との関わりを意識することはありませんでした。ですが勉強から離れて、いざ人の中に入ると、自分から人に話しかけることができず、話そうとしても言葉に詰まり、コミュニケーション能力が乏しいことにも気づかされました。「どこ行ってもコミュニケーション能力が必要なこの社会やったら、私はほんまに落ちこぼれやんか。」そんな考えが頭をよぎりました。

「こんなんあかん！底辺のまま終わるんは嫌や！」

何かしらの形で京大でも特別になりたい。勉強面では勝ち目がないなら別の方法を考えようと、私が立てた新たな目標は、「誰よりも面白くて充実した大学生活を送る」ということでした。

そう決めた私は、気になることになんでも挑戦して、糧となる経験をひたすら積み重ねてきました。ベトナムへの短期留学、受験生に向けた応援メッセージの発信、在来の動植物を守る環境ボランティア活動への参加など、現状を打破するために取り組んできた活動は数知れません。さらに来月には、ニューヨークに行って英語で発表する機会も控えています。経験の豊富さと幅広さでは誰にも負けない。その強みにさらに磨きをかけられるよう、挑戦を繰り返して、誰よりも面白くて個性あふれる大学生活を作り上げていきます。

大学2年間さまざまな活動を通して、多くの人と知り合いました。少しずつですが人と関わる苦手意識は薄れてきました。それでも、私の周りにはなかなか人は寄ってきません。私と深く関わりたいという人はあまりいないのです。きっと、まだまだ人望がないということでしょう。もっと臨機応変に気の利いたことを言えるようになり、物事をわかりやすく伝えられるようになって、「人に頼られるような人間になりたい」と私は思っています。

「何にでもチャレンジ」をテーマに有意義な大学生活を送るという目標は、まだ2年残っています。これからも様々なことにチャレンジし、経験と知識を積み重ね、コミュニケーション能力を向上させて、自分の世界を広げていきます。これを「二十歳の誓い」とさせていただきます。

## 二十歳の誓い

私は幼い頃から中学3年生まで、日常生活の全てを水泳選手として過ごし、スポーツや身体を動かすことが私の生きがいでした。そんな中、私が高校1年生の時「化学物質過敏症」という病気を発症しました。消毒液や化学薬品を使用したり触れたりすることで日常生活に大きな支障がでるのです。手や足の筋肉が腫れ、頭痛や腹痛、吐き気や目眩などが起こり、傷みと辛さで泣きながらの苦しい毎日が始まりました。10年間水泳選手として努力してきた結果、水中に含まれる塩素に身体が過敏に反応したのが原因でした。水泳だけでなく、スポーツで身体を動かすことも体育祭への参加もできなくなりました。

そして、新型コロナウイルスが流行している中で、あらゆる場所で使用されるアルコール消毒液により、症状はさらに悪化しました。病気のことを隠しながら学校にも行けなくなり、人と関わることを遠ざけ、自分自身の無力さに夢や意欲が失われていきました。

そんな時、学校に通うことが精一杯だった私に、高校の担任の先生が、生徒会活動とボランティア活動への参加を勧めて下さったのです。ボランティア活動では、地域活性化のために様々な人と協力し、地域のシンボルである竹イルミネーションを造り、多くの人に見に来てもらえるよう、積極的にパンフレット配りも行いました。

地域の方と関わり、人と接する機会が増えるようになると、これまで身体や心の痛みだけに目を向け、暗く狭いところに閉ざされてきた私が、少しずつ「新しい環境」で嬉しさや楽しさを感じるようになり、身体を動かすことで、心が解放されていく自分を実感することが出来ました。

高校三年間を通して、「隠したい」「苦手」とする部分を個性や特性と捉えることで、本当の自分の能力は生まれるのではないかと考えられるようになりました。

現在、私は大学で社会福祉の勉強をしています。京都市民公募委員に就任したことから、私と同じ病気の人だけでなく、子どもやお年寄りなど様々な人にどう手を差し伸べることができるのかを考えています。また、SDGsの問題に取り組むために、学生団体を立ち上げ、古着を活用した事業も展開しています。

かつては病気の現実に背を向け、人には見せることが出来ないと自己解釈していました。ですが、今は自信をもって「化学物質過敏症だ」と言うことが出来ます。この症状を持ったことによって、新しい知識だけでなく、私を支え、関わって下さった全ての皆様に心から感謝しています。そして、私が経験した苦しかったこと、克服したことをこの場で話すことによって、誰かの背中を押すことが出来ればと思います。

私の理想とする「健康的で愛溢れる社会」を実現するために、小さな夢や希望をもつて進んでいくことを「二十歳の誓い」とさせていただきます。

本日は私達のために、このような盛大な記念式典を開催していただき、ありがとうございます。心より御礼申し上げます。